

編集後記

編集長(ダン シロウ)

自分がこのマガジンの中で執筆者として、どのような位置取りをするかは、いつも意識している。多くの執筆者には渾身の連載をお願いしている。無期限連載とはそれくらいのエネルギーを強いるものだ。

だから編集長でもある私の連載は、一冊のマガジンとして、いろどりを考えたメニューでなければならない。一冊丸ごと読む人はないとしても、ピックアップして毎回読んでいますという読者のために、多様なものでなければならない。

そんなことも考えつつ始めた新連載「蠅螂の斧 part2」でつまづいた。

夏休みに入って比較的時間もあったので、じっくり思案してみた。その結果、新たな執筆には、思いがけないほどの時間を取られた。それにもかかわらず今、十分満足な結果というわけではない。上手くいく時はススッと出来てしまうものだ。難渋して、苦労を積み重ねても、結果がよいとは限らないのは他でもたくさん経験している。まあ、こういう事もたまにはしてみるのが良いかもしれないと思う。

硬軟長短、様々な記事で一冊が構成されてこそそのマガジンである。査読の入る論文は「対人援助学会誌(望月編集長)」として同じく学会 Web 上で別に発行されている。そちらも是非、ご覧下さい。

編集員(チバ アキオ)

「引っ越しました 屋久島に移り住みまし

た。機会がありましたら、ぜひ遊びに来てください。大野睦」という転居の知らせもらったのが 1996 年。1979 年に小学 1 年生で出会って、地元で当たり前のように一緒に歳を重ねた。大学時代は大学は違ってもお互いに福祉の道に行った。そんなある日、屋久島に移住の知らせ。どんなところだろう？是非行ってみたいと思ってから 17 年。やっと屋久島に上陸！

この対人援助学マガジンの連載もしている大野睦氏が代表を務めるネイティブヴィジョンさんの事務所へ。「おっす！」いつも通りのあいさつ！カヌーに、「もののけ姫」のモデルになった白谷水雲峽、ウミガメの誕生、ヤクシカ、ヤクザル…大野さんのおかげで本当にあつという間の 2 泊 3 日がすぎた。

京都より涼しいのも印象に残りました。大野さんはよく言います「屋久島の自然がそうさせるねん」この言葉の意味が少し分かるようになりました。是非、一度屋久島に行かれることをお勧めしますよ！最高！

編集員(オオタニタカシ)

仕事を始めて 10 年、結婚して 5 年、親になって 3 年、編集委員になって 1 年が経過しました。今の生活、仕事を見渡してみて、まずまず自分がやりたいと思っていることができていると思う。そして、これはきっと幸運なことなのだとも思う。

新しいことをスタートさせるのは、いつもスムーズだったわけではない。「○○になったらどうする!？」というリスクを危惧する声に、流れが差し戻されることもあった。けれど、一度スタートさせたものは、止まるべき必然にたどり着くまでは止まることはない。マガジンの連載を見ても、1 つのテーマで長く展開されているものも多く目にとまる。きっと、終着点まで止まることなく突き進んでいかれるのだろうと思う。

私も負けないように、自分の持ち場で力を尽くそうと思う。この仕事に就いて初め

て、長期プロジェクトに取り組み始めた。7
ヵ年計画です。無事全うして、7年後にマ
ガジンで報告することが、今の目標です。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻14号

第四巻 第二号

2013年09月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第十五号は2013年12月15日

発刊の予定です。

原稿締切11月25日！

新規連載者を募っています。編集部ま

で執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

表紙のイラストは2004年の産経新聞、正月紙面を飾ったイラストだ。

出先からケータイ電話で照明や暖房の操作ができる。みんなが出払った家の電気を、防犯上の理由でつけておく。帰宅した時に寒くないように、帰路のどこかで、あらかじめ暖房を入れておく。

こんなことを言っていた10年後の2013年夏、家にいて節電を心がけすぎてクーラーを使わずに、熱中症で死亡する人がいた。わずか10年である。仰天するような違いではないか。

このイラストを依頼されて描いたとき、今を想像することなど出来なかった。

しかしこれが世の中というものである。今、自分たちのしていることを、少し先にはもう覚えていない。そして、その時その時で、それ風なことを言う。

60年以上前の戦争のことを覚えている人は、ごく僅かになった。

「戦争を知らない子ども達」が爺、婆になった。団塊ジュニア世代に、戦争などピンと来なくなっても仕方がない。その下世代が育ちつつあるのだ。

だから、具体的に警告する。我が子を殺したくなかったら、勇ましいことは言うな。近隣諸国との関係について、やたら勇ましいことを言う輩を黙認していると、戦争にかり出されるのはあなたの子だ。言った奴はたいいてい行かない。昔からそうだ。